僕たちはこの日の 勝利を忘れない!

［完全保存版］ 2011ドバイワールドC詳報

SATURDAY MARCH 26, 2011

Unforgettable night for the Japanese

日本のホースマンの悲願ともいえる瞬間が遂に訪れた。ヴィクトワールピサによるドバイワールドC制覇。高く立ちはだかっていた壁を破った16年目の春。

Photostud

H Watanabe

Dubai World Cup

Photostud

Photostud

[クローズアップ]

ヴィクトワール・ピサ

Victoire Pisa

8000キロの彼方へ送った日本を鼓舞するメッセージ

3月26日、ドバイ・メイダン競馬場で世界の強豪を集めて行われたドバイワールドC。日本からの声援に後押しされるようにヴィクトワールピサが日本調教馬として初めての優勝を果たした。日本中に多くの感動をもたらし、自信を失いかけている日本人に勇気と誇りを与えたこの走りを改めて振り返ってみよう。

軍土門隼夫＝文
text by Hayao Gundomon

夜になって風は止んでいたけれど、この日、ドバイを襲った砂嵐が運んできた微細な粒子がナイターの照明を乱反射し、漆黒の闇に奇妙な靄のような膜をかけていた。アラビア語、英語、日本語がでたらめに入り混じった喧噪が、祝祭的なテンションの高さで頭を痺れさせる。気温は30℃前後。動くと汗が滲む。ふと、ここから8000キロ離れた場所には未曾有の災害に苦しみ、暗く重たい気持ちで夜を過ごしている人が大勢いるということが、現実のことなのかどうかわからなくなりそうになる。メイダン競馬場に舞台を移して2年目となるドバイワールドCデーは、現地時間の夜9時半を回り、い

Y.Maeda

あと数秒で起きることが何なのかすぐにはわからなくなっていた

ドバイワールドカップ（UAE-GI）
メイダン競馬場　3月26日　1着賞金600万ドル　北半球産4歳上、南半球産3歳上　AW2000㍍　良　14頭

着順	馬番	馬名	性齢	重量	騎手	タイム(着差)	調教師
1	⑥	ヴィクトワールピサ　Victoire Pisa	牡4	57	M.デムーロ	2:05.94	角居勝彦
2	⑨	トランセンド　Transcend	牡5	57	藤田伸二	½	安田隆行
3	②	モンテロッソ　Monterosso	牡4	57	M.バルザローナ	¼	M.アル・ザルーニ
4	④	ケープブランコ　Cape Blanco	牡4	57	J.スペンサー	¼	A.オブライエン
5	⑤	ジオポンティ　Gio Ponti	牡6	57	R.ドミンゲス	¾	C.クレメント
6	⑧	ジターノエルナンド　Gitano Hernando	牡5	57	J.ムルタ	1	M.ボッティ
7	⑦	ムシール　Musir	牡4	57	C.スミヨン	½	M.デコック
8	⑬	ブエナビスタ　Buena Vista	牝5	55	R.ムーア	½	松田博資
9	⑫	トワイスオーバー　Twice Over	牡6	57	T.クウィリー	1¼	H.セシル
10	③	プリンスビショップ　Prince Bishop	牡4	57	A.アジュテビ	¼	S.ビン・スルール
11	⑭	ゴールデンソード　Golden Sword	牡5	57	K.シーア	2¼	M.デコック
12	⑪	リチャーズキッド　Richard's Kid	牡6	57	R.マレン	½	S.シーマー
13	①	フライダウン　Fly Down	牡4	57	J.ルバルー	12	N.ジト
14	⑩	ポエッツボイス　Poet's Voice	牡4	57	L.デットーリ	1¼	S.ビン・スルール

※馬齢は主催者発表

よいよフィナーレを迎えようとしていた。

喧噪は最後のレースであるワールドCのゲートが開くと歓声に変わり、歓声は、馬群が4コーナーを回ると絶叫に変わった。トランセンドをヴィクトワールピサがわずかに交わし、見慣れた2つの勝負服がその形で重なったまま、目の前に迫ってくる。後ろにはゴドルフィンのモンテロッソとエイダン・オブライエン厩舎のケープブランコがいて、遅れて大外をアメリカのジオポンティが通過していく。

あと数秒で、すごいことが起きようとしていた。でもそれが何なのか、この一瞬で正確に理解することは不可能だった。ドバイワールドCをついに日本の馬が勝つということ。それどころかワンツーフィニッシュを決めてしまうということ。あるいは8000㌔彼方からの応援が本当に届いてしまう奇跡。逆に、8000㌔離れた場所へ、今まさに強烈なメッセージが発信される瞬間を目撃しているという奇跡。それらのすべてが同時に起きていて、どこに心の焦点を合わせたらいいのか、すぐにはわからなくなっていた。

ゴールラインを過ぎると、ミルコ・デムーロ騎手は鞭を持った右手を挙げてガッツポーズを作り、胸の奥から何かを絞り出すように叫んだ。右腕には黒い喪章がたなびいている。隣に並んできたトランセンドの藤田伸二騎手の肩に手をかけると、藤田騎手も手を伸ばし返した。

パドックでは、市川義美オーナーの一行が歓喜の声を上げて抱き合っていた。現地のテレビカメラがそこに寄る。その側で、ふと顔を上げて周囲を見わたすと、そこには人種も国籍も、勝者と敗者の垣根も越えた何百、何千もの笑顔があった。

敵同士でありながら両立していたライバル心と連帯感のバランス

2011年のドバイワールドCデーに出走する日本馬は5頭いたが、うちレーザーバレット（3月17日に出発）を除くヴィクトワールピサ、トランセンド、ブエナビスタ、ルーラーシップの4頭は、3月9日に日本を発った。日本を大地震が襲ったのは、その2日後のことだった。

現地の日本馬の厩舎スタッフたちは、日本の国旗と「HOPE」（希望）という言葉がプリントされたポロシャツを作り、15日の調教から揃って着用した。もちろん、遠く母国を離れたままのスタッフたち自身にも不安や心配がないはずがなかったし、日本でも、例えば角居勝彦調教師でさえ「正直、はたしてこんな時に競馬をやっていていいんだろうかと考えた」という。誰もが、ギリギリのところで自分のモチベーションをあらためて問い直す作業を行った。「チーム・ニッポン」という呼び方やムードは、そんな中から自然と生まれ、醸成されていった。

5頭のうち3頭は同じレースで戦う、本来なら敵同士だった。でありながら、ライバル心と連帯感が、信じられないほど絶妙なバランスの上に両立していた。

メイダン競馬場のトラックを覆うAW（オールウェザー）の人工素材タペタへの適性は、日本の芝馬、ダート馬に限らず、多くの国の有力馬にとって未知の要素となっていた。今年、ブックメーカーで最

直線での競り合いから抜け出したヴィクトワールピサが先頭でゴールイン。歴史的な勝利を収めた

Photostud

も人気を集めていたイギリスのトワイスオーバーは、昨年10着と大きく期待を裏切ったが、今年は同じコースの前哨戦マクトゥームチャレンジラウンドⅢを快勝して臨んでいた。レース前日の共同会見でヘンリー・セシル調教師は、蹄鉄を替えたことが奏功した、と胸を張ったが、欧米の記者たちはそれでもまだ半信半疑な様子で、タペタへの適性について厳しく、執拗に質問を繰り返していた。

レース当日、そのタペタには午前中から水が撒かれていた。昼間の35℃を超える気温の中で、ワックスがまぶされたタペタは真夏のビーチのように熱くなる。散水はその温度を下げるためになされる

Y.Kunihiro

今回の勝利は、多くの日本人の心に希望の火を灯した

が、それだけ水を撒いても第1レース、アラブのGⅠカハイラクラシックの馬場状態は「スタンダード」だった。オリビエ・ペリエ騎手がこれを制して、2011年ドバイワールドCデーは幕を開けた。

追い込みが決まりにくく、逃げ切りも難しいタペタ

この日のタペタはずいぶん時計がかかっていた。ゴドルフィンマイルも、それから日本のレーザーバレットが出走して9着に敗れた1900㍍のUAEダービーも、昨年より1秒以上遅いタイムで決着した。昨年2着の強豪ロケットマンがぐいっと抜け出し、シンガポール馬初の国際GⅠ制覇となった1200㍍戦ゴールデンシャヒーンも、タイムは昨年の勝ち馬より0秒4近く遅い1分11秒28だった。力の要る今年のタペタは追い込みが決まりにくく、かといって逃げた馬も思うように後続を突き放せていなかった。

派手なショータイムを挟んで行われた芝2410㍍のシーマクラシックで日本のルーラーシップが逃げて6着に沈み、ランフランコ・デットーリ騎手がリワイルディングでこの日2勝目を挙げると、いよいよ次が最後のワールドCだった。

パドックに現れた日本の3頭は、3頭とも素晴らしい状態に見えた。いずれも集中して、心持ち、速いピッチで周回している。スタッフの仕事は完璧だった。

ゲートが開くと、外からトランセンドがぐいぐいと前に出て先頭に立った。それは自分のやれることをやる、という意志の、これ以上なく力強い表現だった。

Y.Maeda

ヴィクトワールピサ
Victoire Pisa

2007年3月31日生　牡4　黒鹿毛
父ネオユニヴァース
母ホワイトウォーターアフェア(父Machiavellian)
馬主／市川義美氏
調教師／角居勝彦(栗東)
生産牧場／社台ファーム(北海道・千歳市)
通算成績／13戦8勝(うち海外3戦1勝)
主な勝ち鞍／11ドバイワールドC(UAE-GⅠ)
10皐月賞(GⅠ)
10有馬記念(GⅠ)
11中山記念(GⅡ)
10弥生賞(GⅡ)
09ラジオNIKKEI杯2歳S(JpnⅢ)

日本人がこれまでやってきたことは間違いではなかったことが証明された

逆に、ヴィクトワールピサは出遅れていた。デムーロ騎手によると、ゲートが日本より狭く、開いた瞬間に頭をぶつけたということだったが、見ている方にはわからない。予定通りといった感じで後方に下げたブエナビスタのさらに後ろ、最後方をヴィクトワールピサが進む光景に、日本人たちから悲痛な声が漏れる。

向正面に入ると、大型ビジョンに首をおかしな感じで内側に曲げながら先頭を走るトランセンドの姿が大映しになった。斜め前を走る車の、車載カメラを気にしてしまったのだという。安田隆行調教師はすぐにわかったというが、見ている大半の者はわからない。何が起きているのかとざわついていると、なんと今度はいつの間にか、大外を通ってヴィクトワールピサが一気に上がってきていた。

驚きの行動だった。デムーロ騎手はペースが遅いと感じたので動いた、という。実際、最初の600㍍は39秒64、1000㍍1分6秒42という超スローペースだった。でも、そんなふうに冷静に観戦できている者などほとんどいなかった。角居調教師ですら、出遅れと一気のマクりに「内心ハラハラドキドキでした」と語った。日本人はみんな同じ気持ちだった。

2頭の日本馬が並んで先頭に立ち、馬群はペースを上げていく。レースは典型的な上がり勝負となった。4コーナー、ブエナビスタは後方で前が壁になり、行き場を失っている。万事休す。残り300㍍でヴィクトワールピサがトランセンドをわずかに交わす。直後の外国馬たちとの差が、詰まりそうで詰まらない。そのまま平行移動するように残り200㍍。100㍍。あと数秒で、ものすごいことが起きようとしていた。

そしてそれは本当に起こったのだった。

フェブラリーS勝ち馬と有馬記念馬が競り合った事実

間違いなく世界最高峰の一つである場所で、日本の有馬記念馬とフェブラリーS勝ち馬が競り合ったという事実を、僕たちはもっと誇っていい。もしかしたらそれは「時計のかかるタペタ」という特定の条件下でしかかからない魔法のようなものかもしれないけれど、でもそのことは、僕たちが自分たちのチャンピオンを選ぶやり方が間違っていなかったということの、確かな証明なのだ。

それはたぶん、競馬という小さなジャンルの中だけの話ではなかった。2011年ドバイワールドCのゴールシーンが示したのは、もっと広い意味で、僕たち日本人がこれまでやってきたことは間違いではないということ、そして僕たちがこれから未来に向かって成すであろうことに対しても、自信と誇りを持っていいんだという、励ましのようなものだった。

だからこそ僕たちは、こんなにも競馬を愛しているのだ。

すべてのレースとセレモニーが終わり、観客が帰り始めると、メイダン競馬場には盛大な花火が打ち上げられた。その轟音をバックに、ヴィクトワールピサの関係者たちは記念撮影をして、万歳三唱をして、一本締めをして、それでもまだウイナーズサークルでの歓喜の輪を崩さない。このハッピーな空気が、8000㌔の彼方へ届きますように。砂嵐にけむる夜空に咲いていくつもの大輪の花を眺めながら、心からそう思った。